

平成 29 年 9 月 25 日

関係各位

熊本大学大学院生命科学研究部産科婦人科学
教授 片渕秀隆

拝啓

中秋の名月と呼ばれる秋の月を想う時、夜長の空に輝く一回り大きな満月が頭の中に浮かんでいますが、英語では「HARVEST MOON」、収穫の月と表現されると聞きました。作物が実り、その収穫の時季を示し、形而下の生活の中にある呼称なのでしょう。

7月27日（木）～29日（土）の3日間にわたり熊本で開催させて頂きました「第59回日本婦人科腫瘍学会学術講演会」では、12人の海外ゲストをお招きし、1,973名の参加者による熱いご討議を頂きました。また、「第38回日本妊娠高血圧学会学術講演会」を、9月22日（金）、23日（土）に22年ぶりに熊本で開催させて頂きました。One diseaseを対象にした学会で例年は2百名ほどの参加ですが、今回は招請や教室員を含めて376名の参加があり、私にとりまして最後の全国学会も大過なく無事に終えることができました。物心両面でご支援頂きました関係各位にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。妊娠高血圧症候群の歴史は、紀元前19世紀に書かれた現存する最古の医学パピルスに子癇発作のことが記されていたことにまで遡ります。19世紀に入り妊娠中の痙攣、浮腫、蛋白尿、そして高血圧が包含される病態として順に明らかとなり、欧州を中心にひとつの疾患群として体系化されていきます。日本では、宇土市出身で東京帝国医科大学を卒業し、後に日本医師会会長も務めた小畑惟清が1920年に初めて胎盤に成因を求めました。戦後に本症候群の病因に関する研究が盛んに行われてきた中、熊本大学の加来道隆教授の胎盤由来の多糖体に対するアレルギー説、日本医科大学の真柄正直教授の胎盤由来ポリペプチド説の二大病因論の論争は今も語り継がれています。これまでの、重症化阻止とターミネーション時期決定の議論に代わって、根源的な病因論から治療を模索する研究へと新たな展開がみられる今日を迎え、改めて三人の先達の慧眼がうかがえます。

10月と11月の予定表を同封致しました。10月1日（日）の午前に開催します第226回熊本産科婦人科学会では、ワークショップとして「帝王切開癒痕部妊娠の診断・治療・予防」を企画しました。日常の産科臨床に直結する問題ですので、是非ご参加下さい。

敬具